

第1回カーボンニュートラルやまがたアクションプラン 改定検討ワーキングチーム 議事概要

令和7年9月9日(火) 午前9時30分～11時10分
あこや会館ホール

○ 議事

- (1)カーボンニュートラルやまがたアクションプランの改定について
- (2)カーボンニュートラルに向けた山形県のこれまでの取組みについて
- (3)意見交換

(1)(2)についてまとめて事務局より説明後、各構成員より意見をいただいた。各構成員の意見要旨は以下のとおり。

○ 各構成員の意見要旨 <発言順>

【安達信樹氏】

- ・ 所属会社では、電力分野に関しては再生可能エネルギーによる電力の導入、燃料系についてはJ-クレジットによるオフセットという方法により、全社カーボンニュートラル体制を整備。2050年までこのカーボンニュートラル体制を続ける。
- ・ また今後は、J-クレジットによるオフセットの割合を、省エネや再エネ導入をますます進めて最小限にしていく。サプライチェーン取引全体の排出量の削減を狙うため、取引先とも協力しながら Scope3 分野の削減を狙う。
- ・ アクションプランはどれも良い内容なので継続し、着実に進めるのがよい。一方で、自分事として考えて、何をしていくか決断をするのが大変つらいので、その決断を後押しするような施策がもっと増えればよい。

【高橋志穂氏】

- ・ 山形の豊かな自然を楽しみ、その豊かな環境を次世代に繋げていくために何ができるかというのが、自動車の分野では、とても大きな課題。車を乗り換えて満足ではなく、乗って楽しく、我慢をすることなく生活力も上げていくというように、自動車が使われるよう提案していけたらいいと思っている。
- ・ 次世代自動車の普及率を2030年度には50%にしていくということで、たくさんの車を使う山形県において、電気自動車・水素自動車・ハイブリッド車など、多くの県民の目に触れ、試乗体験・エコドライブなどを通し、ライフスタイルがイメージしやすいよう、団体としても車を楽しく使っていただくための場を提供するということに重きを置いていくべきと考えている。

【佐藤江理子氏】

- ・ ここ2、3年でちょっと変わったなと思うのは、お客様の方から「やまがた省エネ健康住宅」にしたいというご希望が増えてきたこと。お客様の住宅に対する考え

方が変わってきたというのもあるが、やはり資材が高騰しているため、建てるのであれば、今後も長きによって住みやすい快適な省エネ住宅を建てたいという思いが強くなっていると感じる。

- ・ 「やまがた省エネ健康住宅」と同時に太陽光や蓄電池を導入するのは、金額面からハードルが高く、どうしてもそこまでというのは言えない状態。もし余裕があったら太陽光や蓄電池を載せられるような屋根形状の住宅を提案していく。
- ・ 既存の住宅のリフォームや、ひと部屋断熱などを求めるお客様もとても増えている。補助金があったからつけてみたら大変良かった、全部の部屋をリフォームすることはできないが、いつもいる部屋や水回りの断熱性能を上げただけでもすごく快適になったという声もあり、今後はより取り組んでいきたい。

【赤川健一氏】

- ・ 住宅の省エネに関しては、「やまがた省エネ健康住宅」という新築建て替えの取組みが前面に出ているが、リフォームでどれぐらいCO₂が削減できるのかということも、もう少しあってもいいと感じる。
- ・ 専門人材の育成の視点で、大学や専門機関にこういう学部があり、こういうことが学べるとか、こういった資格が取れる、こういった技術者になれるといった、高等教育機関との連携のようなものがアクションプランにあってもいい。
- ・ デカボ My スコアは、CO₂排出量が目に見えるような形になりとてもいいが、そこから興味を持った人が、より詳細に診断できるようなツールがあってもいい。

【加藤瑶子氏】

- ・ 農業者が、やまがた GAP をする中での自分がどのぐらい化学肥料を使っているのかの把握や、有機肥料への切替え、秋耕して土作りを工夫するなどの取組みの中で、少しずつカーボンニュートラルに取り組めるよう普及していきたい。
- ・ JA や全農として、農業者に対し GAP や J クレジットの申請手続きについて支援しているが、すぐには利益に繋がらないことや手続きが必要なことからなかなか浸透していないという状況。いずれも農業者自身の経営にとってメリットのある取組みだと考えており支援を続けていく。
- ・ ドローンを使うとか省エネな新しい農機に変えるなど省力化・省エネ化を取り入れることが、自分の経営にとってもメリットがあるというところをポイントに、周知推進を図っていきたい。

【浦田格氏】

- ・ 蔵王の樹氷の復活にも関わっているが、気候が変わってしまうと、樹氷自体ができなくなるのではという危機感を県民がすごく感じているのがわかる。一方で危機感があっても、実際にどうしていいかわからないといった声が聞かれるなど、普段仕事している中でも県民アンケートの結果と同じような印象を感じる。
- ・ 一つの提案として、森林の吸収そのものだけではなくて、木材利用を長く続けることで、炭素を閉じ込めておくという「木づかい運動」の視点も入れるといいので

はないか。

【佐藤徹哉氏】

- ・ 今年の夏も大変暑く、午前中のうちに暑さ指数が危険値を超え、運動ができなくなってしまったということが5日ほどあった。
- ・ 地球温暖化を食い止める対策は、これからの地球で生きる子供たちが住みよい環境であるようにするために待ったなしであり、そして、子供たち自身も地球温暖化について学び、防ぐための行動を取れるようにすることも大切。特に自分事として積極的に参加する「かかわる」についての取り組みは子供たちにとって必要。小学生向けガイドブックの活用や、標語・ポスターコンテストへの参加なども継続しながら、WTで学んだことを学校教育の側から生かしていきたい。

【渡邊脩太氏】

- ・ コラムにおいて、電気料金ってこうなっているのだとか、再エネプランなどについて触れることで、お財布のところから県民運動を進めていくのもいい。そういった中で再エネ設備導入が有利だということに気づき、アクションに繋がっていただくことも大事かと思う。
- ・ 次世代を担う子供たちの環境教育の部分が大事と長井市としても考えており、子供から大人、学校から地域というふうに波及させるというところも重要なポイント。県立の高等学校の電力は地域再エネプランが多いと思うので、高校生にもこういったところの学習を深めてもらえればと思う。
- ・ 脱炭素経営のきっかけは、省エネ診断と認識している。流れとしては、省エネ診断をして、エネルギー使用量の見える化をして、お金をかけずにできるところから省エネをして、補助金などを活用して設備更新して最後に再エネ導入というのがスタンダードである。どこからしたらいいかわからないという事業所に対しては、こういったモデルをお示ししてやっていく必要がある。
- ・ 米どころの山形として、特に中干し期間の延長によるJクレジットの創出はすごく武器になると思う。

【工藤美乃氏】

- ・ 具体的なその施策をどうやって大学生に伝えるのかというところが大事だが、私達の世代で言うと、結構情報が多すぎて、自分が知りたい情報しか入ってこない。ネットを使って大学生に発信していくことが大事。
- ・ 大人から大学生への発信は大学生にとってハードルが高いので、大学生から大学生に発信していく視点で「やまカボ・サポーター」を活用していけたらいい。
- ・ 自分自身が「やまカボ・サポーター」として活動することで、自分としての情報も増えていったという経験があり、環境活動へのアクセスを大学生として増やしていけたらいいのではないかと考える。

【五味馨氏】

- ・ 脱炭素社会というのは、健康で安全で便利で快適なものでなければいけない、今よりももっと良い社会、住みたい社会でなければいけないと思う。
- ・ いろいろなことが現状のアクションプランは網羅されており、研究者からすると大変素晴らしいが、一方でたくさんありすぎてどれをやったらいいかわからないということにも繋がりやすい。とりわけこれが大事なキーになるアクションだということを示すことができるといいのではないか。
- ・ キーになるアクションとして、「身近で」「波及効果があり」「効果量が大きく」「実行可能で」「魅力的なものを」という五つをうまくアクションの中で作り出して、あまり数が多くなく、できれば三つぐらいまで打ち出すと、多くの方が乗ってしやすいアクションになるのではないかと思う。

【三浦座長】

- ・ 山形県の現状分析の中でも CO2 の排出多いのが家庭と自動車。家庭について、効果量が大きいのは家そのものをどう変えるかであり、新築やリフォームであれば窓を変えるなど。
- ・ また自動車について、自動車そのものを変えるとすれば、やはり電動。山形県はハイブリッドや電気自動車はかなり多い方であり、そこに対してもっと重点施策を投入していくことが重要ではないか。
- ・ 太陽光発電装置は家庭に取り入れるサイズとして一番いいツール。一方で山形は雪国だから合わないじゃないかというネガティブな発想があるが、そこはちゃんとデータで示す。一番重要なのは、どれぐらいで元が取れるかというコストデータ。お金で表現し、メリットを徹底的に示していくということは全てにおいて重要。
- ・ 山形県の家庭の CO2 排出量がなぜ多いかというと、灯油をたくさん使うから。石油の給湯器が非常に多いので、電化してエコキュートに変えていく、それも、夜間ではなく昼間の電力を活用したエコキュートに変えていく。バッテリーにお金かけるよりエコキュートに変えるほうが圧倒的に費用対効果が大きい。そういうデータに基づいたものをアクションプランにしっかり入れることが重要。

以下、当日欠席の構成員意見（開催後取得）

【色摩慶子氏】

- ・ カーボンニュートラルやまがたについて知らない方、忘れた方が多いように思う。県民一丸の運動にするためには、再度県民に対して、県民の行動が変わったこと等で CO₂ が減少してきたこと（現在の到達点）とありがたい姿を、わかりやすい形で繰り返し発信することが必要。
- ・ 行動を変えるには、日々のくらしも変えていくことが継続性を考えても重要。組合員は年代にかかわらず環境面に関し敏感だが、家計にもとても敏感。CO2 削減は家計にも助かる、CO2 削減＝●●円削減、服を我慢すると●●円もお得など、お金という目に見える形だと興味が引きやすいかもしれない。参加の意識を持っていたくには、楽しくて目に見える、そして変えることで家計も助かる仕掛けが必要。